

NICHE

1993

volume

17

工学院大学建築学科同窓会誌

龕

龕 [かん] 1. 仏像を納める窟子。 2. 棺(ひつぎ)。——広辞苑
ニッチ [Niche] (独 Nische) 龕(かん)とも書かれる。壁体内に掘られ、多く平面半円、半円筒状で、上に1/4半球をいたたく凹所。彫像などを置く。——共立・建築辞典
niche (nich), n. [Fr. niche, from L.nidus, a nest] 1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust, or vase. 2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it. ——Webster's New Twentieth Century Dictionary

NICHE No.17

目次

- 2 『NICHE』No.17発刊によせて 高木雅行／建築学科同窓会会長
- 3 建築学科の近況 水野宏道／建築学科主任教授
- 建築都市デザインコース都市専攻 中嶋 泰／建築学科教授
- 建築都市デザインコース建築専攻 望月大介／建築学科助教授
- 建築学コース計画系 安原治機／建築学科講師
- 建築学コース構造系 望月 洵／建築学科教授
- 建築学コース環境設備系 宇田川光弘／建築学科教授
- 建築学コース生産系 吉田倬郎／建築学科教授
- 10 同窓生ニュース
- TOPICS／ヤクルト独身寮公開設計競技 実施案に本学建築学科
出身の秋元敏雄氏
- TOPICS／建築学科同窓会第27期総会開かれる
- 12 同窓生を訪ねて 原清氏に聞く
- 18 同窓生からの便り 喜多淳子（1989年度卒業）
泉本晋一（1970年度卒業）
- 24 第26期（1991年）一般会計報告
- 25 第27期（1992年）一般会計予算
- 26 建築学科同窓会会則
- 28 建築学科同窓会運営委員名簿
- 30 会誌『NICHE』発行のための賛助金者
- 32 平成4年度建築学科卒業生名簿

NICHE No.17

平成5年3月19日発行

発行者 工学院大学建築学科同窓会

東京都新宿区西新宿1-24-2

tel (03)3342-1211 内線2025

『NICHE』vol. 17発刊によせて

工学院大学建築学科同窓会会長
高木雅行 (1982年修士課程修了)

建築学科同窓会の皆様には、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

昨年1年間のあいだにも数多くの会員の皆様にお会いし、11月に広島で行なわれた校友会全国大会では、中国地方で設計事務所を開設され地域に根差した活躍をされている方々や全国各地でさまざまな分野にてご活躍される方々にお会いすることができました。

これまでは、どうしても会員の多い東京近郊の情報が片寄りがちでしたが、各研究室やその同窓会OB会などの運営をされている方々のところには、いろいろと各地での同窓生情報があるようです。今後は、校友会の各地の支部内に建築のグループをつくっていただいたり、各地で情報が集まる交際範囲の広い方に「建築学科同窓会通信委員」になっていただくなどして、東京からの一方通行の

情報ではなく、全国ネットの「相互通行」の同窓会としていきたいと思っております。どうか皆様の素晴らしいアイデアやご意見などをお手紙やファックスなどでお寄せください。

またお忙しい中、貴重な時間を割き今期同窓会の運営に当たられた役員の方々に感謝いたします。そうした皆様のご尽力の結果、盛況なる総会の開催、会則の充実、同窓会会員名簿の発刊(1月現在印刷中)、会員の方を中心とした広告掲載のご協力、新『NICHE』の編集、校友会提携カードの振興など、次々に進んでまいりました。今後は、ヤング同窓生の方にもご活躍いただき、研究室ごとのOB会やさまざまな行事の情報交換やネットワークを図るなどして、ますます活性化する同窓会にしていきたいと思っております。どうか皆様のご協力をお願いいたします。

建築学科の近況

工学院大学建築学科主任教授
水野宏道



本学1部建築学科は拡大を続ける建築学各分野の社会的ニーズと有能な人材を育成するため、昨年度より建築学コース、都市建築デザインコースの2コース制を導入した。自己の適性に応じた専門教育と少人数教育が可能な本学独特のカリキュラムは着実に成果をあげている。2部建築学科は社会人教育を目的に昨年度に募集を再開した。建築学全般を学ぶカリキュラム内容であるが、特定分野も深く学習できる。1・2部ともに入学志願者は相対的に増加傾向を続けている。また、本年は経済的不況下にありながら就職状況は昨年同様順調に維持した。これは建築学科卒業生が業界で高く評価されているため、まことに喜ばしい。

研究と教育の充実を期すため、本年度は廣部達也教授(建築計画)、広沢雅也教授(構造)、沢岡清秀助教授(建築デザイン)、渡辺定夫客員教授を招聘した。これにより先任教員は35名、これに客員教授3名、兼任(非常勤)講師32名を加えた関係教員は70名になった。各専任教員は教育活動のほか、各専攻分野の研究テーマを持ち、研究・設計活動をする一方で、学協会役員、学協会、官庁の委員会役員、委員として社会的活動を行ない高い評価を得ている。

近年は高度な専門知識を持つ人材の社会的要請が高い。本学は大学院の拡大充実を重要施策とし定員増、情報学専攻の増設などを図っている。建築学科には毎年30名以上の修士課程在籍者がおり、この中には外国人留学生も含まれている。院生は指導教授のもとで研究や創作活動を行なうほか学部学生の教育にも関与している。本年度

は大学院関係で以下の学位取得者、学会賞受賞者を出した。

●工学博士 岩田俊二

論文題目：都市近郊地域に於ける農村集落の拡大に対応する集落基盤整備計画の手法に関する研究

●1991年度日本建築学会優秀修士論文賞 西尾新一

論文題目：横連結型連続槽を有する蓄熱式空調システムの有効利用に関する研究

外国人建築家、研究者の来日を機に学生、卒業生を対象とした科主催の講演会は下記の2件で、概要は以下の通りである。

●F.L.Wrightの建築について Edgar Tafel氏

同氏は1932年創設の「タリアセン・フェローシップ」第一回生で9年間ここで学んだ。有名な「落水荘」「ジョンソンワックス本社ビル」の設計、工事監理も手掛けた。建築の保存を考える国際シンポジウムで来日した同氏を南迫助教授の助力で本学に招いた。講演はスライドにより、巨匠ライトに直接師事した豊かな経験を通し、その生活、設計活動を多角的に紹介し、感銘を与えた。

●フランスに於ける集合住宅とライフスタイル モニーク・エルブ女史(パリ、ヴィルマン建築学校教授)

都市再開発における住宅を講演テーマに来日した同女史を安原講師の助力で本学に招いた。パリでは新開発ニュータウンから都市内中低層型再開発に方向転換し、町並みを保存しつつ既存建物の再生を行なう街区形成型住宅開発を行なっている。講演は豊富なスライドにより、フランスにおける集合住宅の歴史と現代の集合住宅につい

て説明があった。

各講演会には多数の卒業生が参加した。今後は広報活動をより充実させたい。

10月5日には原田鉄男教授(彫刻家)が引率するベルサイユ建築大学一行15名が日本研修旅行の途中訪問し本学学生や大学院生と作品交歓会とレセプションを催した。海外交流は教員の国際会議、シンポジウムでの発表、学生による海外の建築・都市への訪問など、機会が増えている。国際化は今後いっそう進展すると思われる。

建築学科創設期より教育、研究両面に長年功績のあった正木省三教授(構造)は本年(1992年度)をもって退職される。先生が去られるのは寂しい。また、小林啓美客員教授、小沢明特別専任教授、古川修特別専任教授も本年をもって退職される。先生方が建築学科に注いだ情熱に深く感謝したい。

建築学科の教員は半数が芸術家(?)である。科内はお互いの立場を尊重しつつ、自由な雰囲気まで至極居心地がいい。一面、主任としては「東ねる」のに苦勞した1年でもあった。

都市建築デザインコース 都市デザイン専攻

工学院大学建築学科教授
中嶋 泰



建築学科の新コースは、都市建築デザインコース（建築デザインと都市デザイン専攻）として1991年4月に第1回の入学生を迎え、現在は2年次生までが在籍しております。過日実施した1993年度入学試験（前期試験2月、後期試験3月）の合格者が入学することになると、3年次生までがようやく整うこととなります。

新コースの学生諸君は、1年次・2年次までは一緒に共通意識の中で、新コースの科目を勉強することになりますが、3年次になると建築デザイン・都市デザインそれぞれの専攻に分かれて、各自の進むべき方向、分野の専門科目を選択することになります。

都市デザインコースは、従来の建築学科に設置されていた都市計画科目を基盤として、新たな視点と展開を試みることにより、集団としての地域・地区をはじめ、都市レベルの諸事象を建築技術、計画と融和、相互理解を深めつつ勉強することになります。

学生諸君の意識や考えは、都市に対して諸々な側面を抱いていることも事実ですが、第三者的な立場で都市や建築を語るのではなく、当事者賭して、また創造者としての立場からの義務と責任を持った人間像をいかにしたら育てられるか、また教育の現場から発進できるかを、学生諸君とともに頑張りたいと思っております。

教員の構成では、中嶋泰(教授)、小嶋勝朗(講師)に加えて、今年度より専任者として東京大学工学部都市工学科より渡辺定夫(教授)を迎えることとなります。また兼任講師としてはUG都市設計社長・鈴木崇英氏、東京都北多摩部建設事務所長・古川公毅氏の参加を得

ることになり、この他の専任・兼任の諸先生とともに新コースの発展充実に努力したいと思っております。

新コースも発足して3年目を迎えるわけですが、4年間のひとくぎりまでには走りながら実りのある実行を図ることになります。思想的に一貫性を理想としても、思い

にまかせられない局面に直面することが多々あるかと存じますので、皆様のご理解とご支援をお願いする次第です。

末筆になりますが、同窓会会員のご活躍・ご発展を願うとともに、私たちのコースのお話しの機会を与えてくださった『NICHE』にお礼を申し上げます。

厚木市中心市街地まちづくり提案

厚木市街地の中心部を軸としたまちづくり提案。中心部の再開発と周辺地域の活性化を図る。中心部の再開発は、高層ビルを軸としたまちづくりを推進する。周辺地域の活性化は、緑地を軸としたまちづくりを推進する。

計画概要

1. 計画区域：厚木市中心市街地（約100ヘクタール）

2. 計画目的：中心部の再開発と周辺地域の活性化を図る。

3. 計画内容：高層ビルを軸としたまちづくりを推進する。緑地を軸としたまちづくりを推進する。

土地利用計画

1. 中心部：高層ビルを軸としたまちづくりを推進する。

2. 周辺部：緑地を軸としたまちづくりを推進する。

本専攻の都市計画設計課程

1. 都市計画の基礎知識を習得する。

2. 都市計画の応用知識を習得する。

3. 都市計画の実践知識を習得する。

最先端都市計画情報

1. 最先端都市計画情報を収集する。

2. 最先端都市計画情報を分析する。

3. 最先端都市計画情報を活用する。

厚木市中心市街地まちづくり提案

都市建築デザインコース 建築デザイン専攻

工学院大学建築学科助教授
望月大介



建築学科は1991年4月より建築学と都市建築デザインの2コース制に再編成されました。この背景には4コース制大学科の受験生に対するマスプロ教育イメージの解消と新宿校舎の場所性、それに広域的環境デザイン教育の社会的ニーズがあります。したがって、これまでの工学的要素の強いコースから都市および建築デザインに関わる科目を主軸とするコースが設置されました。

新カリキュラムの概要

これまでの建築学科カリキュラムと新コースの相違点の主なものとして、設計製図(デザイン)時間の倍増(週2日4時限)、それに工学系科目の縮小があげられます。1、2年次に都市、建築両専攻共通の基礎科目を配置し、3年次よりそれぞれの専攻に分かれて専門科目を学習するシステムです。その中心は都市デザイン1-3、建築デザイン1-3ですが、この科目は週2日間の午後に行なわれる設計主体の科目であり、工科系大学としては数少ない試みで、どちらかといえば、美術系大学に近い科目内容です。

建築デザイン専攻科目の中で、デザイン1-3は3年前期から4年前期までに12単位、課題内容にも多様化を図っています。その他の建築デザイン科目として、空間デザイン1-2、建築ディテール、インテリアデザイン、現代建築論があり、工業科目として構造デザイン、都市設備、さらに共通科目に建築CAD、専攻セミナー、生態学概論など建築学コースに比べ、社会人文系の色合いが強いものです。また都市専攻との明快な分離を避け、相乗効果を狙っているこ

ともこの新カリキュラムの特色といえます。

従来の卒業研究(論文、設計)は卒業制作に変わり、都市建築デザインコースにふさわしい内容に生まれ変わります。研究室での専攻セミナーについては原則として建築学コースと同じですが、デザインコース学生はデザインコース主担当教員研究室での選択となります。しかし学生の希望で技術系研究室選択の余地を残しています。

今後の課題

新コースの学生は本年4月より3年次となり、本格的専門教育期間に入ります。1、2年次における基礎設計1-3を中心とする設計教育を通して、この新コースの目標である都市(広域的)および建築デザイン教育がこれから正念場を迎えます。

2年間のデザインコース教育を振り返るとき、工学系科目の減少による設計(デザイン)学習時間の増大は、建築学コースと比べると、その表現方法、授業への積極的な

個人差はあるものの、個々に集積された設計能力は養われたと思います。

一方、教員側からは、新カリキュラムへの対応として、これまでの建築学コースの学習を踏襲する分野と新しく加える分野があり、その面では試行錯誤でした。中でも基礎設計科目での都市と環境デザインを建築教育とどのような接点で扱うか、苦慮した点です。さらに講義科目におけるこれまでの建築学との相違をどのように反映すべきか、今後の課題です。むしろ新コース実行委員会を設置し、常に検討し続けておりますが、従来の建築教育とは一味違った方向を見いだせればと思います。

新コースは種々の課題を抱えながらも、工学部における新しいかたちのデザイン教育を指向しております。卒業生諸兄におかれましては、今後ますますのご発展を念じますとともに、本学建築学科系への心暖かいご支援をお願いいたします。



建築学コース 計画系

工学院大学講師
安原治機 (1967年度卒業)



1991年4月から、建築学科では建築学コースと都市建築デザインコースの2コースを施行しています。1960年代に在学した方は、建築学科に設備コースがあったのを記憶していることと思いますが、基本的なシステムと運営方法は類似しています。入試は別々に実施し、独自のカリキュラムを運用していますが、教員組織は分けず、卒業研究も多少の制約はありますが、希望の研究室に所属することができます。ここでは建築学コースの計画専攻について概略を述べます。

建築学コースは、91年以前に実施していた建築学科と基本的には同じです。しかし、都市建築デザインコースの開設に伴い、科目数、単位数が増加したので、限られた資源（教員数、施設、予算）を有効に活用するため、計画専攻の科目をかなり減らしました。2コース制の実施にあたり、都市建築デザインコースを新コースと呼んでいましたが、正しくは、建築学コースも新コースであり、現在94年度の改定を目指して検討中ですので、ここでは私見を述べるにとどめます。

どの時代でも「今の若者は」とか「今の学生は」という批判が必ず出るものです。私もこのような書き出しで始めると年齢を感じるのですが、どの時代でもその時代特有の学生気質があります。今の学生は、豊かで安定した時代に育ったので、素直で明るく、友達づきあいも良く、楽天的です。しかし、利点の裏には欠点もあります。自主性、主体性がなく、努力は最小限にする省エネ型人間で、仕事を天職などと考える人は化石

であると考えています。このような学生の利点を伸ばし、欠点を補うカリキュラムと教育方法を考えねばなりません。建築学コースには多くの科目が設置されています。一般的な学生は3年前期までに卒業に必要な単位数を取得してしまい、専門の勉強をしてほしい3年後期からの履修者が少ないのが現状です。改定にあたり、科目の整理と履修学年の移動を考えています。また、各専門について履修することが望ましい科目を、専門別の必修科目とすることも考えています。その他にも種々の考え方があると思いますが、ややマンネリ化した私を含めた古い教員だけでは画期的な構想が浮かび難いのも事実です。しかし、幸いにも建築学科は今、教員の交代期です。波多江、伊藤、大庭、正木先生らが定年退職され、1994年度に今泉先生、1995年度に十代田先生が定年を迎えられます。一方、設計では東大から広部、榎事務所から沢岡、都市計画では東大から渡辺、構造では建設省の建築研究所から広沢、生産・施工では京大から遠藤の各先生がおいでになり、新たな視点と新鮮な感覚で建築学科の改革への提言が期待されます。そして、その成果の一部は八王子での2年生までの基礎教育、中でも設計製図の内容の大幅な改定に表われています。

建築学コース 構造系

工学院大学建築学科教授
望月 洵



保岡さんはすでに亡く、横田さんの退任から10年余が過ぎ去り、本年、正木さんが退任されます。在職40有余年です。代わりに建築研究所から新耐震設計法に関わった広沢雅也さんが教授として1992年から来られました。現在、教授に十代田さん、広沢さん、望月、助教授に宮沢さん、講師に篠原さん、倉持さん、大塚さん、助手に近藤さんが、という体制で頑張っています。主な研究は、十代田研究室＝振動、広沢研究室＝耐震構造、望月研究室＝耐震壁、宮沢研究室＝木質構造、篠原研究室＝振動、倉持研究室＝免震、大塚研究室＝木質構造です。おかげで、み

なさんに協力いただいた八王子実験棟は閑古鳥の鳴く間もなく動いています。

卒研生の数は他系に比べて落ち込みが激しいですが、大学院や女子学生は多く、卒業論文や修士論文はレベルアップしています。電車の中に忘れても、そんなに恥ずかしくありません。このごろの学生は面倒なものを嫌う傾向があります。構造もそのひとつです。カリキュラムもこの影響を受けてサワリ集になっています。卒業生にとって、恨み骨髓の小生担当の構造計画も毎回スライドを使ったり、模型で採点したり、気をつけています。

建築学コース 環境設備系

工学院大学建築学科教授
宇田川光弘



環境設備系の現在の体制は水野研究室、中島研究室、足立研究室、大橋研究室、宇田川研究室の5研究室と環境・設備系実験室であり、新宿校舎24階と八王子校舎3号館をベースにして、平成4年度で41名の卒論生と修士1・2年合わせて13人の大学院生が論文の作成、研究に励んだ。

現在の1部、建築学コース（平成3年度新入生から建築学コースと都市建築デザインコースの2コース制となった）の環境設備系に関する科目および担当者は別掲の通りである。

いずれも半期、2単位である。内容的には従来からのカリキュラムを踏襲しているが、他大学と比較しても充実した内容であると自負している。しかしながら、卒業に必要な単位分しか修得しない最近の学生気質も見られるので、何らかの工夫も必要かと思っている。今年度の卒業研究生は一研究室あたり6-10人である。卒論の発表会（2月18日）では25題の研究発表が行なわれた。テーマをキーワードで示すと主に次のようになる。

水野研究室：コジェネレーショ

ン、オフィスの環境、放熱器、屋外局所暖房

中島研究室：蓄熱槽、ソーラーハウス

足立研究室：ダクトの音響特性、残響調節機構、有限要素法による音響解析

大橋研究室：太陽熱ヒートポンプ、天井加圧チャンバー空調システム、太陽熱床暖房

宇田川研究室：太陽エネルギー利用住宅、快適性とエネルギー、垂直温度分布と熱負荷

以上はBタイプ（前・後期で卒論）の卒論の様子であるが、中島研究室では6人、足立研究室ではふたりがAタイプの卒業研究（前期に卒論、後期に卒業設計）を選択している。

平成3年度に再開した第2部は平成5年度から3年生の授業が始まり、専門教育が本格化する。環境・設備系の科目数は1部に比べると絞られているが、「設備管理」のような1部にはない特徴ある科目も設置している。

大学院の充実は重要であるが、環境・設備系ではここ数年、1学年あたり毎年6-7人が修士課程に進学している。旧新宿校舎では、研究室が分散していたが、新校舎では新宿校舎の教員、大学院生、卒論生はみんな24階にいるため、研究室内はもちろん研究室間のコミュニケーションも密になり、いっそう活況を呈している。

環境工学第1（足立）	同第2（足立）	同第3（宇田川）
設備計画第1（大橋）	同第2（中島、鈴木）	
設備基礎理論第1（宇田川）	同第2（宇田川）	
給排水衛生設備第1（水野）	同第2（水野）	
空気調和設備第1（中島）	同第2（中島）	
電気設備（中村）		
設備設計第1（大橋、関）	同第2（水野）	
設備実験（水野、中島、宇田川、足立）		

建築学コース 生産系

工学院大学建築学科教授
吉田倬郎



工学院大学が計画、構造、生産、環境設備の4コース制を設けたのは1972年（昭和47年）カリキュラムからです。これは、構想としては他大学に先んじた進んだカリキュラムだったといえますが、私がお世話になっている生産系について言えば、当初は構造系の軒下を借りなければ必要な単位が取れない状態で、4コース制とはいっても不完全なものでした。こうした折、私が今泉先生と一緒に生産系教員として工学院大学に参ったのは1978年（昭和53年）でした。当時、武藤章先生が「これからの建築な生産面が重要になるので、本学建築学科もそれに対応した教育研究の充実を図りたい」と語ってくださったことが今でも印象に残っています。

その後、カリキュラムの改訂を機に、生産系科目も若干増やしていただき、またカリキュラム全体としてコースに関わる条件が緩くなったこともあり、生産系に進んだ学生諸君もコースに関わる条件については生産系科目だけで対応できるようになりました。しかしながら教員の陣容は、以前からの難波先生に、今泉先生と私が入った3人だけで、他の3系に比べいかにも手薄な状態が続いてきており、生産系を志望する学生諸君や生産系の学生を求めてくださる社会に対し、少々肩身の狭い思いをし続けてきております。その間、幸いにも教授として橋本先生、白山先生、古川先生を一定期間お迎えできたことは、授業面の充実に大きな効果があったといえます。また白山先生と古川先生らは、在任中、国内外の学会や建設省などで工学院大学教授として活躍されており、本学建築学科の名を高ら

しめてくださっております。そうした中、この4月には京都大学から若い遠藤先生をお迎えする運びとなりました。建築生産、住宅生産について主に組織面からの研究を展開されている遠藤先生が本学でいっそうの活躍をされることは、生産系にとってはもとより建築学科全体にとっても良い刺激になることで、大いに期待したいところです。

ところで、社会の建築活動に目を向けると、近年の好況も一段落して、ひとつの転機にあるといえます。設計や施工の専門分化がすすむ一方で、ひとつの建物が構想されてから設計、施工を経て使用され、やがて除去されるまでのライフサイクル全体を捉える視点、また、そうしたことに関わる組織のあり方に関する視点が注目されてきています。このような総合的な視点は、これからの日本の建築活動の方向を考えるうえで重要です。生産系では、専門を深める一方でこのような総合的な視点の養成も重視していますが、皆さんいかがでしょうか。建設会社、住宅会社、設計事務所といったオーソドックスな建築関係の職域に加え、近年では建材メーカー、ビルメンテナンス、不動産関係、ジャーナリズムなど、建築出身者の活躍が期待される職域も拡がりつつあります。卒業生諸君には、専門を活かすとともに総合的な視野を持って、大いに頑張ってほしいと思います。

ヤクルト独身寮公開設計競技 実施案に本学建築学科出身の秋元敏雄氏

東京建築士会（清家清）の創立40周年記念事業「ヤクルト独身寮公開設計競技」で、本学建築学科出身の秋元敏雄氏が優秀作を受賞、実施案として選ばれた。

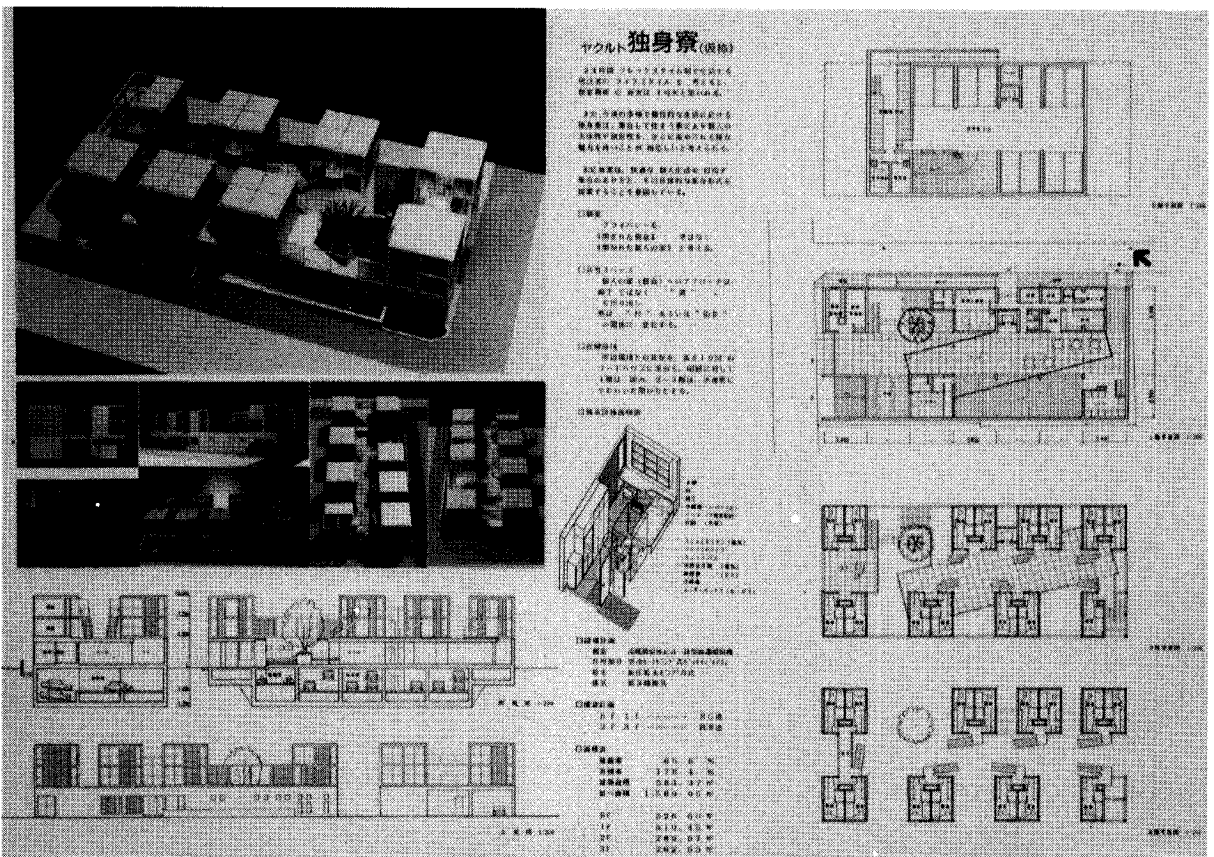
秋元氏は1941年生まれ、1965年工学院大学建築学科卒業。その後、INA新建築設計研究所、カトー設計、川島甲土建築設計研究所、山下設計を経て、1970年建築設計工房を設立。

このコンペは、はじめにクライアントを公募し、クライアント決定後に公開コンペを実施して設計者を決定するという、日本初のコンペ方式を採用して話題を集めてい

た。コンペ応募総数は825点。その中から優秀作3点が選出され、クライアントとの協議の結果、秋元氏の案が実施案に決定した。当初は今年着工、来年完成の予定であったが、今後ヤクルトと秋元氏の合意により具体化させていく予定である。

なお、クライアントは民間5件、自治体1件（途中辞退）の応募があり、東京建築士会のコンペ準備特別委員会（近江栄委員長）がヒヤリングし、ヤクルトをクライアントに決定した。その後ヤクルトが東京・八王子に建設を計画している男女共住型独身寮の設計者を

公開コンペで選定するため、コンペ要項の作成および審査委員会（近江栄、桑原潤、坂本一成、平倉直子、福士勝夫、柳澤孝彦らの各氏）を設置し、作品を受け付けた。



建築学科同窓会第27期総会開かれる

平成4年6月14日、工学院大学新宿校舎0811教室において、工学院大学建築学科同窓会第27期総会が行なわれた。50人を越える同窓会会員が参加した会場では、前会長の南迫哲也氏による開会の宣言に続き、新役員承認が行なわれた。（新役員は別掲）

その後、第26期年度事業報告、収支決算の承認、第26期年度会計監査報告、第27期年度事業報告、収支予算（案）の承認、会則改訂と滞りなく議事が進められた。

総会に引き続き、同窓会の新副会長にもなった建築学科助教授・谷口宗彦氏による講演会が開かれた。スライドを多用した講演では、谷口氏の最近作を含むこれまでの作品が系統だてて紹介され、同氏の建築、特に住宅に対するスタンスを熱っぽく語られた。

懇親会では、若い会員と古くからの会員が談笑するシーンも見られ、同じ大学を母校とする者同士のコミュニケーションが世代を越えて行なわれた。

来年度からは、この懇親会をより発展したものにするべく、また総会への活発な参加を促すため、新宿新校舎のアトリウムを利用した合同の研究室OB会などを行なう計画もある。

- | | |
|---------|-------|
| (新) 会長 | 高木雅行 |
| (新) 副会長 | 南迫哲也 |
| 副会長 | 金尾武彦 |
| 副会長 | 小高鎮夫 |
| (新) 副会長 | 谷口宗彦 |
| (新) 幹事 | 西尾順文 |
| (新) 幹事 | 静賀正樹 |
| (新) 幹事 | 柴田卓次 |
| (新) 会計 | 中村加須美 |





原清氏に聞く

本日はお忙しいところ、お時間を割いていただきまして、大変ありがとうございます。今年度から建築学科同窓会の会長をはじめ役員が一新いたしました。『NICHE』も多少の衣替えをすることになりました。その中で「先輩を訪ねて」というページがあったのですが、タイトルを「同窓生を訪ねて」と変え、その第一回目に原さんにご登場いただくことになりました。どうぞ、よろしくお願いいたします。

■どこで私の名前を探しあてたのかな。私でお役に立てますかどうか。連絡をいただきましてね、古いアルバムなんかを引っ張りだしてみたんですよ。いやあ、本当に久しぶりに卒業アルバムなんかを見て、懐かしいですね。

学生時代

■実は、『NICHE』のインタビューだと言うんで、ちょっと探し出したものがあるんですよ。実は『NICHE』の前身は僕らの時代につくられたんです。青焼きをホチキスでとめただけのものですが、表紙に工学院大学建築学科有志同窓会と入っていますでしょう。これですよ。私の卒業年が昭和37年度なんです。そのときに有志で同窓会をつくろうとってつくったのがこれなんです。これは当時の人たちにとっては懐かしいものだと思いますよ。

どことなくこの表紙の絵柄がライト調ですね。

■そうそう、学生時代には天野太郎先生や樋口清先生がいらっちゃって、まあ言ってみればライト、ライトとフランク・ロイド・ライト一色の時代でしたね。このころは1学年がA、Bクラスに分かれていて、100人ずつくらい、合計200人くらいかな。

A、Bというのは、どういう分け方なんです。卒業設計と卒業論文という分け方なんでしょうか。

■いやいや、単純に、200人いて一度に教えられないからふたつのクラスに分けていたんです。

卒業アルバムを拝見しますと、皆さんお若いですよ。

■そりゃ30年前ですからね。先生方みんな髪の毛がふさふさしてましたよ（笑い）。

この写真は大学祭で展示する作品をつくるために猪苗代湖に行ったときのものです。もちろん有志で集まって、合宿しましてね。煙草がなくて、湖の周りを「煙草拾い係り」が吸殻を拾ってきたりしたんですよ（笑い）。なにせお金がなかったから。

何年生のときだったんですか。

■4年生です。

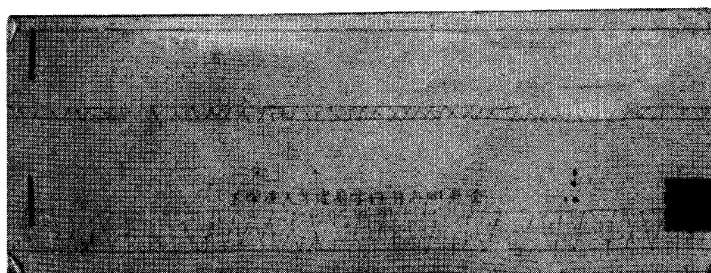
まあ、この写真なんかを見るとビルラッシュですよ。これは新宿の大ガードですよ。埼玉銀行（あさひ銀行）を見た方向ですね。

どんな学生生活だったんですか。

■学校に社交ダンス部があるでしょう。舞踏研究会っていうのかな。けっこう強いんですよ、工学院は。それに入っていたんです。

「クイック、クイック、スロー」ってね（笑い）。それからアマレスもやりましたし、グリークラブの創設にも参加していたんです。グリークラブでは大学の校歌をレコーディングしたんです。とにかく何でもやりましたね。

僕は高校を卒業して、一時働いていたんですよ。昭和30年卒業なんです。それから働いて、ところ



昭和37年につくられた「工学院大学有志同窓会」の名簿



猪苗代湖での合宿

がこれでは駄目だと思って大学を受ける決心をしたんです。当時流行っていたのがレーヨン、化繊ですね。東レとかクラレとかの。それで農工大の繊維関係の学科に行こうかなと思っていて、けっきょくいろいろ受けたのが全部落ちてしまって、で、工学院大学の2次募集があったんです。機械科とかいろいろあったけれども、一番やさしそうなのが建築でしたから（笑い）、建築を受けましてね。それに受かったんです。

原さんが構造を選ばれたのは、どういった理由からなんですか。

■構造計算をやったら、すぐにお金になったから（笑い）。3年4年ですでにアルバイトで構造をやっていたんです。一般の事務所に行ってね。卒業に必要な単位は3年までに取得してしまっていたから。4年で都市計画が必修であるだけでした。お金を持っている友人なんかはいろんなところに行っていましたけど、僕はあまりお金がなかったからアルバイトに精を出していたんですよ。わけが分からないんだけど、反曲点を出してとかやっていたらそれがすぐにお金になった（笑い）。こりゃあいいやと思って構造の道に進んだんです。僕は十代田研究室で卒業論文を書いたんですが、卒業設計は波多江健郎先生のところだったんです。構造の専攻なのに卒業設計は優をもらいました。そのときは「意匠のほうがいいかな」

なんて浮気心が起きましたけど（笑い）。でも意匠は仕事をとってこなきゃならないし大変そうだけれど、構造は、ある意味では待っていれば仕事がやってくる、なんて考えましてね（笑い）。不純な動機ですよ。

アルバイトはずいぶんやりましたよ。みんな飲み食いに使ってしまいましたけれども。

その当時の構造の授業というのは、どういった雰囲気だったんでしょうか。

■雰囲気は----デタラメ見たいなものですよ（笑い）。構造の卒業研究のテーマはトップアングルだったんですが、なんにもやらなかったんです。他の同期生たちはシェルをつくってそれを破壊するとか、コンクリートの梁の破壊とか真面目にやりましたけれど、僕は使い走りみたいなことをやりましたね。それでも単位は取れました（笑い）。勉強はしませんでしたよ。本当にしませんでした。望月洵さんには「お前みたいなのが構造をやっているなんて」とよく言われたものです。

だいたい当時の学生は、今に比べると娯楽が少なく、せいぜい麻雀でしたよね。そうでもなければ、新宿駅西口側の汚い呑み屋でしたね。僕は麻雀を知りませんでしたけれど、4年になったときに新宿校舎が新しくなったんですよ。それでやっと学生食堂ができたんです。バス代が往復で15円という時代でしたね。

学生時代にはレーモンド事務所アルバイトをされていたのですか。

■いや、全然やっていません。だいたいレーモンドなんて名前を知りませんでしたからね（笑い）。僕がレーモンドに入るんだと言ったら、友達が「すごいな」と言うんですよ。

A. レーモンドはライトの弟子ですから、ライト一色だった当時の学校ではレーモンドの名前もよく出てきたのではないですか。

■そうでしょうね。でも、僕は知らなかった（笑い）。名前を知り

ませんでしたけれど、もちろん有名な事務所だというぐらいは思っていましたよ。意匠の連中はよく知っていましたけれどね。就職はゼネコンのほうにしようと思っていたんですよ。で、レーモンド事務所に推薦されて入ったら「俺も、俺も」と。いっしょにふたり入りました。ですから工学院から同じ年に3人入っているんです。

レーモンド事務所時代

■レーモンド事務所に入ったころは、そんなに大世帯ではありませんでした。少なかったですね。24-5人しかいませんでした。今は120-30人はいるんじゃないですか。やめて2年になりますけれど、最後のほうは事務所内でも名前が分からない人間がいましたから（笑い）。

レーモンドのやり方で、一番特徴的なところはなんですか。

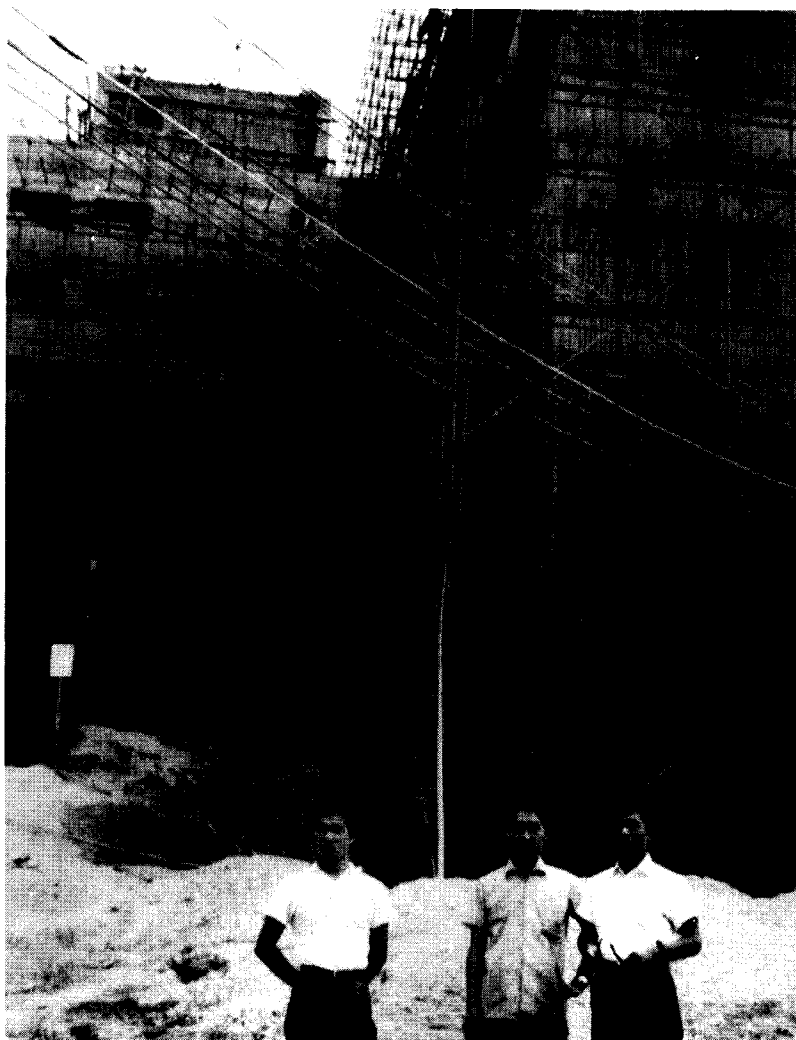
■レーモンド事務所というのは、すごく厳しいところでしてね。コンクリートの調合から、現場での打設の時に密になるように竹の棒でつつ突かされたり、合羽を着て下で木槌で叩いたり。打放しが多かったでしょう。現場でそれを勉強してこいというわけです。型枠に小幅板を使っていた頃ですね。本実ですよ。今なら仕上げに使うようなものでした。まあ、入って1年から2年は現場ですよ。

卒業されて、すぐにレーモンド事務所に入られたのですか。

■ええ、推薦で入れました。だけど、入ってからは苦しかったですよ。現場では今の3Kなんてものじゃなかったですね。今とは時代が違っていましたね。

意匠の部所でなくても、たとえば構造の方でも現場に行ったのですか。

■そうです。現場に出るといっても、常駐じゃないんです。東京近郊の現場で、今日はどこそこでコンクリート打ちがあるから行けというわけです。僕が入ったときには、レーモンド事務所は南山大学



南山大学の現場

をやっています、その現場にはちよくちよく行きましたよ。現場をまず踏まえて、初めて意匠とか構造の仕事につかされるんです。ネコ押しから何から全部やりましたよ。でも、面白かったですね。頭からコンクリートをかぶったりね（笑い）。そうやって、鉄筋やコンクリートのことを覚えていったんですね。現場を知らないと、配筋検査なんかに行っても分からないでしょう。

現場を知らないと、本当の意味で作品がつかれないということですね。

■ええ。あと、レーモンドは「Simple is good」と言っていて、シンプルにシンプルにという方向でつくっていききましたね。

それは意匠面だけでなく、構造的にもシンプルにつくっていったのですか。

■そうですね。ただ、お施主さんの希望もありますから、すべてがシンプルなものにはなりませんよね。全面的に任された場合は、シンプルにシンプルにつくっていききました。

最初に担当されたお仕事は何だったんですか。

■最初に構造設計を担当したのが、南山大学の廊下。三角形がふたつくつついたかたちの廊下です。教室と教室を結ぶ廊下が一番最初の仕事でした。全部自力でやったのが、千葉の総武カントリーのクラブハウスです。最後の仕事になったのが、西山荘カントリー倶楽部クラブハウスですかね。集

成梁を使ったものです。

レーモンド事務所にはクラブハウスの作品が多いですね。

■やっぱり、当時のゴルフというのは上流階級の遊びでしたから。そういう階級にコネがあったというのが理由のひとつではないでしょうか。それと、ゴルフ場の設計はコースの設計者とクラブハウスの設計者がコンビになってやるんですね。ですから、コースの設計者が次の仕事をやるたびに指名がかかるといったこともあります。

西山荘カントリー倶楽部クラブハウスでは、集成梁が使われていますね。新しい材料、たとえばこの集成梁など昔は法規上使用できなかったものですが、使えるようになりました。このように新しい材料が出ると構造の世界も変わるものなのでしょうね。

■昔、集成材の梁を使いたいと申請したら、行政のほうに駄目だと言われたんです。なかに鉄骨の梁を入れて、仕上げに集成材を貼るのならよいというわけです。本末転倒ですよ（笑い）。たしかに新しい材料、工法が開発されるたびにこちらも勉強です。僕がレーモンド事務所に行ったころは、みんな新しいものにとびついていましたね。

レーモンド事務所の作品は、正統的なモダニズムが多かったと思うのですが、構造的にはどうだったのですか。

■けっこう大胆なことをやっていましたよ。

それをいかにもやっていると見せていないところがいいですね。

■今は構造的にも意匠的にも、いかにも「手をかけてやったもの」だぞ、すごいだろう」という建築が多いでしょう。『新建築』とか見てもすと、奇妙奇天烈なものが多いでしょう（笑い）。メンテナンスなんかどうしてるのかねえ。平行感覚が狂ってしまうような建物とか、あるでしょう。頭が痛くなりますよね（笑い）。レーモンドは「建築は中も外も同じだ」と言うんです。外から見て格好いいけれど、中に入ると何でもないつまらないものだということでは駄目な

んです。つまり中がキチッとしたら外もちゃんとするという考えなんです。アーチを使った立教高校なんかでも、外から見るとなんでもない。だけど中に入るとすごいですよね。それが本当の意味での建築だと思います。天野太郎先生の授業で、住宅の設計があったんです。そのときに天野先生は「住宅で一番気をつけることは、物干し場をどこにするかだ」とおっしゃったんですよ。デザインに気を取られるあまり、物干し場を置く場所がなくなってしまう。おうおうにして物干し場は家の裏側につくられることになってしまうんです。もちろん裏が南向きならば別ですが（笑い）。結局、そういう住宅は使いにくいものになってしまう。同じですよ、レーモンドの考え方と。

荻窪の東京女子大が老朽化したというので、その構造を調べたことがあるんです。コンクリートはアルカリ化してないかとかですね。建築を勉強している方は、一度ご覧になるべきだと思いますね。本当に細かく気をつかってつくられているんです。レーモンドの素晴らしさを再認識しました。

コンクリートの場合、スランプ値というものがありますよね。最近では20とか21cmです。ところがレーモンド事務所では18cm、場合によっては15cmというコチンコチンのコンクリートですから、堅い密実なものが打てるわけです。コンクリートというのは、そんなにセメントを入れてはまずいんですよ。スランプが大きいということは軟らかい、つまりセメント量が多いからなんです。ちょうど僕が静岡県修善寺の競輪学校の現場に常駐しているときだから、昭和41年あたりかな、ポンプが出てきたんですよ。それからですね、昔のような堅いコンクリートが少なくなってきたのは。

競輪学校のバンクというんですか、トラックはなかなかダイナミックですよ。

■現場責任者として常駐したのが30代前半ですね。前日の配筋検査で悪いところが見つかって、それを直させる指示をしたんですよ。で、打設の日にそこが直っていませんでした。ですから、コンクリートポンプが待っているのに、完全に直すまでコンクリートを打たせなかったりしました。若気のいたりですかね。無茶をしましたよ。今ではとてもできませんよね。ミキサー車が10台くらい並んで待っているのに打たせないんですから、そのコンクリートはすべてパーですよ。細かいところまでキチッとしないと駄目だというレーモンド流ですね。普通だったら、直っているところから打たせますよ。でも、直しが追いつかないうちにコンクリートが来たらどうするんだ、というわけです。そういうことをすることで、現場が変わるんですよ。原さんが見て駄目だと言うと、それは絶対に駄目なんだと浸透していくんです。大きなプロジェクトのときには特に大切なことですね。

お仕事で何か失敗談というのがありますか。

■旭川のNHKの仕事のときに、試験杭を打ったんです。もっと打て、もっと打てとやっていたら、上のハンマーが飛び出てしまったことがありました。すぐ横にドサッと落ちてきましてね、怖かったですよ。耐力が出るまでやれと教わってきましたから、どんどん打たせたんですよ。もっと耐力が出るはずだとやらせたら、やりすぎて失敗したんです。佐賀の現場では、アースドリルで失敗しました。もっと掘れ、もっと掘れとやっていたら、固い層にぶち当たって、中で折れてしまったんです。ですからあの現場の地中には、いまだにアースドリルのバケツが埋まっている（笑い）。それだけ厳しくやったということでしょうかね。

RCの仕事が多かったのですか。

■鉄骨も多かったですよ。鉄の場合は寸法検査でキチッとつくりまますから、トラブルがないんですよ。現場で見張っていただければいいからです（笑い）。

独立して

独立されたのは、ずいぶん経ってからということになりますね。

■僕は定年退職ではないんです。レーモンド事務所の定年は65歳ですから。技術者がいないということで、定年を迎えた人たちでもいったん退職して顧問というような人たちで事務所に残るんです。そういう方たちも、実際に実施設計とかやっていますからね。設備の分野が多いですね。

独立して、専門が構造だからといって構造だけやろうとは思っていません。すべてやろうと考えています。事務所名にも「構造」という言葉は入れていませんし。たとえば、飾ってある感謝状は僕の住む団地のリフォームに対してなんです。僕が構造をやっていることを知りませんからね。一般の人たちは、建築をやっているらしい人だから、お願いしてみようかということなんです（笑い）。けっこう勉強になりました。なんでもやったほうがいいですよ。逆に言えば、なんでもやらないと会社を経営していけないということです。

お仕事は順調ですか。

■独立してから、仕事をとってするのがどんなに大変なことか、分かりました（笑い）。レーモンドにいたときは、構造は意匠が持ってきたものをやっていたわけで、意匠が変わってしまうと文句ばかり言ってんです。「なんで変えるんだ、時間もないのに」と（笑い）。ところが独立してみると、そんなことは言っていられないんです。まず仕事をもらわなくてはいいけない。実は、マンションをひとつ設計したんです。意匠も含めて、建物ひとつつくるのは、時間がかかりますよね。打ち合わせか



レーモンド事務所での最後の担当となった「西山荘カントリー倶楽部クラブハウス」(『新建築臨時増刊 木の空間』より)

ら、計画して図面化してと、何ヶ月もかかります。その間食べていかななくてはなりませんから、ストックも必要になってくる。大変なことですよ。ただ、その分設計のほうがいはいでしょう。構造のほうは1/10とか1/8でしょう。かなり苦しいですよ。今は景気が悪いですし（笑い）。

現在はおひとりでなさっていらっしゃるんですね。

■ええ。ひとりでやっています。ひとりでほとんどできる状態なんですよ。コンピュータもありますから。

何台もコンピュータが置いてありますが、構造の世界では比較的はやくからコンピュータが導入されていますよね。抵抗はありませんでしたか。

■レーモンド事務所はコンピュータ導入が遅かったんです。それで僕は自分で買って使ったんです。40歳くらいのときかな。BASICから勉強しまして、自分でプログラムを組んだんですよ。その前はいわゆるポケコン、電卓みたいなポケットコンピュータっていうのかな、それを使っていました。

ロール紙にプリントアウトするタイプですね。

■そうそう、それでプログラムをつくって使っていたんですよ。コンピュータにはまったく抵抗なく入りましたね。今は容量が大きくなっていますから、楽になりましたよ。

卒業されてからの大学との関わりはいかがですか。

■さきほど話しました東京女子大の調査の時、コンクリートの強度を調べるために大学の難波さんのところをお願いしたんです。大学に行くとき学生が僕に向かっておじぎをするんですよ。僕のころに比べるとずいぶん礼儀正しくなった（笑い）。学生時代からつきあっている人間もいっぱいいますよ。同期の友人から「息子がレーモンド事務所に入りたがっている」なんて相談を受けたりね。親父のほ

うは設計事務所できあいがあって、その息子が自分の下で働くという親子2代のつきあいになっているわけですよ。2代目の時代になってしまいましたよね、僕らの世代は。

人間ひとりがつきあう範囲というのは非常に限られていますよね。それを、いろいろな分野の方とつきあって、できるだけ範囲を広げていきたいと考えています。

長時間にわたって、興味深い楽しいお話をありがとうございました。

■いやあ、こんな話してページになるか心配ですが、ご苦労さまでした。

はら・きよし

1936年 京城で生まれる
1946年 大連より引上船で帰国
1955年 香川県立丸亀高等学校卒業
1959年 工学院大学建築学科に入学
1962年 工学院大学建築学科を卒業
(株)レーモンド建築設計事務所入社
1990年 (株)レーモンド建築設計事務所を退社
1991年 (有)原清設計事務所を東京・多摩市に設立
現在にいたる



まずは前置き。まあ驚きました。私なんぞに『NICHE』の新コーナーの原稿依頼がくるなんて。そんなこんなで『NICHE』ってどんなのだったっけと思い出そうとしてみたのですが、年に1回送られてくる卒業生名簿のようなものという印象だけ。知っている後輩が卒業するまでぐらいいは、あの人はどこに就職したのかな?などとめくっていたものの、去年のなんかは封も開けずにそのままだったのですから-----。

私にとってそんな『NICHE』ですから、内容はなんでも良いからとはいうものの抵抗がありまして、気が重いのですが、思いつくままにずらずらと書くことにさせていただきます。私はあまり難しいことを語れるような人間ではありませんので、馬鹿なことを言っているなどと思われる方もいらっしゃることでしょうけれども-----。

同窓会誌ということで、まずはこんな話しでも。

私、就職して2年目なのですが、1年目の昨年度は会社の研修システムにのっとって大阪におりました。ただいま東京での社会人1年生でございます。私のでた山下研究室のOB会は毎年12月第一週の土曜日に催されておりまして、東京勤務の本年度は初めてOBいやOGとして工学院大学新宿校舎の18階でのOB会に出席いたしました。そこでのエピソードをお話ししたいと思います。どこの研究室でもたいていはOB名簿などをつくったりしていることかとも思いますが、とかく人数が多くなるにつれて、連絡がとれない人が増えてきて、住所や勤務先など不明だったり、違っていたりするものです。もっぱら使える情報ではないと決めてかかっていた私なのですが、この日は、それではいけないと思い知らされた日になりました。

私は、竹中工務店の東京本店設計

部に昨年4月に配属されたわけですが、500人以上もいる設計部ですから最初はビルが別のところでした。9月に会社の引越しがありまして、設計部が一カ所にまとめられたのですが、それでも4フロアに分かれておりますし、かなりの人数なものですから知らない人ばかりのようなものです。

ある日私がお世話になっている現場の所長さんを介して、設計部内の別の課の方々と昼食を一緒にすることになりました。11月の終わり頃でしたでしょうか。社内の同じ部署とはいえ、知らない課の課長さんとその課の方ですから少々緊張した昼食でもありました。まあそれはそれで何のことはない私の会社でのある日の1日の出来事だったので。

1週間後ぐらいの土曜日でした。12月第一週の土曜日で、毎年行なわれている山下研究室のOB会にでかけた私は、たまたま早く新宿に着いたものですから、新しくできた大学棟とは別のほうの棟をぶらぶらと見て回っておりました。そうしたらどこかで見たことのある人が-----。そう、1週間ほど前に、一緒に食事をした課長さんではありませんか。

「上原課長!上原課長!こんにちは。こんなところでお会いするとは-----」と声をかけましたら、しっかりと私のことを覚えていてくださっていて、

「やあ、喜多君」と。

「昔とすっかり変わっていて、どこから入るのかわからないよ」と迷っていらっしゃるご様子。

「課長はどちらへ?」

「同窓会があつてね」

「-----同窓会?もしかして-----課長は工学院大学のご出身ですか?」

「うん、そうだよ」

まさか工学院大学のいろいろある研究室が、よりによって同じ日に同窓会をやるわけがないだろうし、もしかしたらとおそろおそろ

きた・じゅんこ

1989年 建築学科(山下司研究室)卒業

1991年 東京芸術大学大学院修士課程修了

竹中工務店入社

現在 竹中工務店東京本店設計部

伺って見ました。

「山下研ですか？」

そうしたらご返事が

「そうだよ」

ときたものですから、もう大変！
「うひゃー」って感じですね。
同じ研究室の先輩が、同じ会社の
同じ部署にいらしたわけですから、
それも1週間ほど前に昼食を
ご一緒したばかり。下っぱ社員と
してはそれぐらいのことは抑えて
おくのが常識というものでしょう
し……。今までまったく知らなかつ
たなんて私も迂闊でした。

「えーっ！そうだったんですか。
私も山下研だったんです。今から
同窓会に行くところだったんです
よ。いっしょに行きましょう」
と、ふたりして会場に向かったの
でありました。

幸いにして、上原課長は優しくて
おらかな方なので、私が今まで
知らなかったことなども気になさ
らないご様子。

「そうかね。知らなかったかね」
と。

もうその日のOB会はすっかり盛
り上がってしまったのは言うま
でもありません。

それからというものの、社内で会
うたびに声をかけてくださって
います。この前などは、

「エントランスの丸柱、きれいに
できていたじゃないか。所長と打
合せをするのに立川の現場へ行
って見せてもらったよ」

と、私の担当の現場の話が出て
きました。きっと所長からお聞き
になったのでしょう。私が描いて
現場へ持っていった初めての詳
細図に基づいて出来上がった、エ
ントランスピロティーの丸柱だ
ったのです。

「柱の躯体がこの大きさだから、
その周りに取付けるわけですし、
目地をあまりとるとタイルのよ
うになってしまって、せっかくの
石の良さが出ないと思うんです
が---」

と、石の製作限度や作業性も分か



らずに描いた図面を作業所に持っ
ていって、所長に

「石の作業目安は30-40kgでね。
50kgが限度なんだよ。コンクリ
ートの比重が $2.4t/m^3$ というの
は良く知っているかと思うけど、
石は比重が $2.7t/m^3$ だから厚40
として直径1,600の丸柱だから
----」
と教わって、計算して描き直した
図面なのです。

上原課長は仕事が大変なのにもか
かわらず、廊下などでお会いす
るときはいつもニコニコしてい
らして、どこか仕事を楽しみなが
らやっていたらっしゃるご様子
です。それにひきかえ私は、コ
ピー室に行ったりサンプルを取
りに行ったりと、社内を走り回
るのが仕事のようなものです
から、廊下は結構必

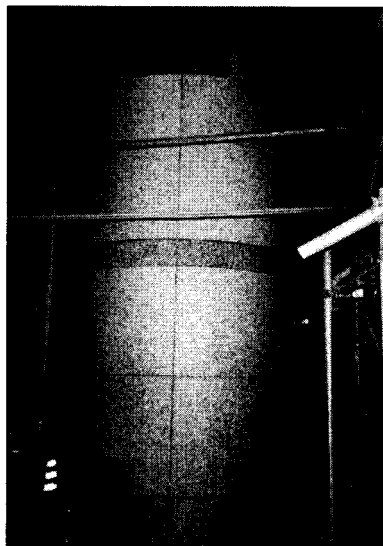
死で歩いていたりしてゆとりが
なく、気がつくのが遅かったり
して、課長のほうからお声をか
けてくださることのほうが多い
かもしれません。

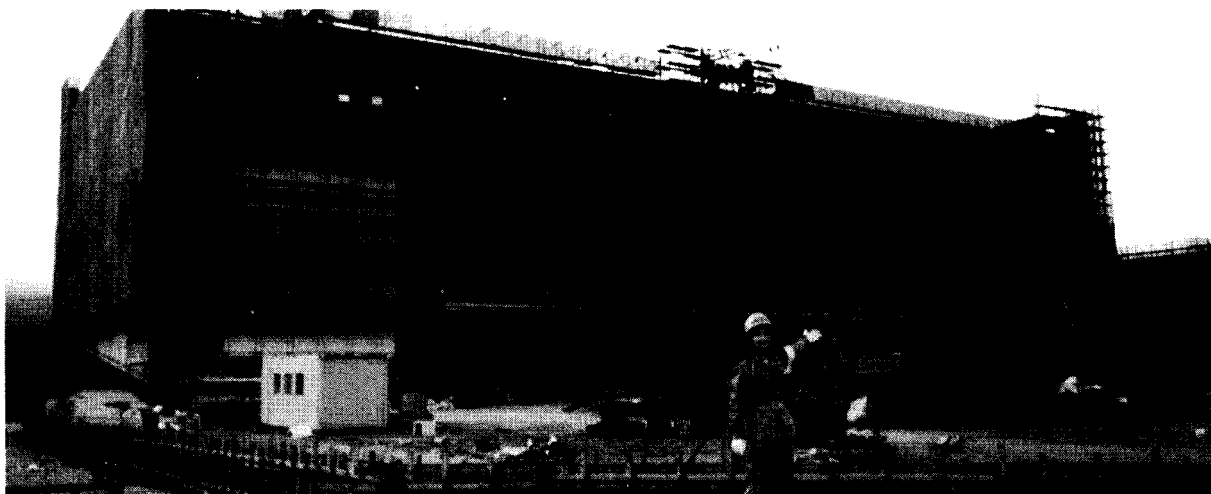
写真は上原課長が抱えるプロ
ジェクトルームへお邪魔したと
きの写真です。壁に張り付けた
図面はスタディしてきたものだ
とか。模型写真も貼ってあつた
りして----。区営住宅の計画
なのだそうです。

「『NICHE』の原稿を書かなく
てはいけなくなりまして、助け
ていただきたいのです」とお願
いになったところ、こころよく
一緒に写真を撮っていただきました。

とかく社会に出てみると、大学
が同じ、研究室が同じという
だけで展開していくお付き合い
って結構多いですね。大切に
していきたいですね。必ず良い
仕事に結び付くに違いありませ
んから。などと同窓会誌らしい
話しとしてまとめてみたりし
て----。

といった私は現在、その上原
課長にほめられたエントランス
ピロティー丸柱のあるオフィス
ビルを担当しています。立川
駅の北側です。そもそも昨年
4月に設計部に配属されたば
かりですから、当然のことな
がら最初から担当している
わけでもなく、ベテランの方
の下についてお手伝いをして
いる程度ですが----。目下、
内部の仕上げ工事にかかっ
ていて、いろいろ





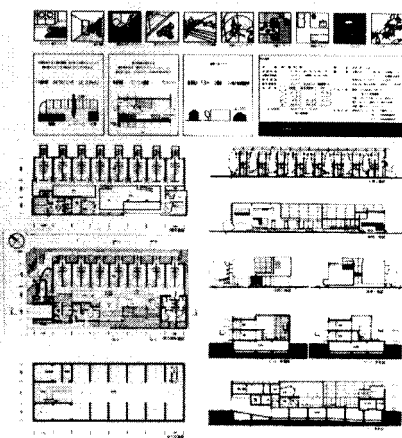
な材料を選んだり模様貼りのデザインなどをやっております。5月に竣工しますので、お近くの方は見てやってください。設計って仕事は、建築主の要望、ユーザーの希望、施工者側の都合などをすべてまとめていくことです。そして、多くの人々とぶつかりあって建物はできていくのだということが、やっと少しづつ分かりかけてきているところです。

毎日の設計の仕事の中で、自分が思うような設計をし、建築主さんにプレゼンテーションをします。そこへ到るまでにも社内の関門がいくつもあります。また建築主さんの要望に応え、自分の思いを抑えなければならなかったりします。目の前の仕事としてさばいていく毎日の仕事の中で、特に忘れてしまいがちな施工者の立場を大切にしなければと時々感じています。現場へ持って行く図面は施工者の期待にも応える図面でありたいと心掛ければと感じています。製図板の上で何となく引いただけの一本の線が、現場ではどれだけの仕事になるかをわかまえながら---。そして偉そうではありますが、ややもすると設計どおりにつくるための道具のように施工者を見ているような建築家にはご注意ください。現場の施工

者は設計者以上にその建物を自分のものにしていくということ。ゼネコンに就職したということもあって、昨年研修で現場員を4ヶ月間やりました。私の配属された現場は竣工前で、入社1年目などの仕事は掃除や養生が主でしたが、自分が墨を出したところが本当にできていく手応えも味わうことができました。設計図で曖昧なところが、自分の墨出しによって処理されていく中で、建物をつくっているという実感が湧いたものでした。そこに設計者よりもこの建物の詳細を理解しているという自信がありました。また仮囲いの中は毎日通う自分のオフィスであり生活空間でもありました。そして、しょせん建築主さんのものではあるのですが、竣工引き渡し後、自分が大切にしていたものを取られてしまったような寂しさに

かられたことも体験しました。忙しい忙しいという毎日の中で、時々振り返るようにしています。本当に品質の高い建築物はつくってくださる人々の手にかかっていることを----。ゼネコン屋さんの一言といったところでしょうか。

ところで最後に、建築士会のヤクルト独身寮公開競技設計に、工学院大学出身の秋元敏雄氏が実施案に選ばれました。同じ大学出身の方が入ると嬉しいものですね。実は私も会社でオフィシャルチームのメンバーとして参加しておりました。残念ながらかすりもしませんでした。楽しそうな雰囲気の寮に出来上がりましたので、社内での評判もまずまずでした。せめてこの誌上にも載せてやってください。





泉本晋一 (1970年度卒業/倉建築デザイン主宰)



人、地域、建築、人生を求めて東京生まれの東京育ちでありながら、受験を前に高校の担任に勧められるまで知らなかった工学院大学を卒業して、はや四半世紀になろうとしている。在学中から社会人時代、修業時代、そして独立してからの10数年を振り返ってみると、何かを求めて走り続けてきたように思う。何を求めているのか今も定かではないが、走ることをやめられそうにない。

刺激的な学生時代

建築を学ぶ私学なら早稲田大学と言われ、実際入学してからも早稲田の学生やカリキュラムなどとよく比較された。

高校までは日一杯遊び、大学では好きな専門分野の勉強をしようと思っていたが、入学してガッカリしてしまった。1に遊び、2に遊びという雰囲気は失望し、一時はもう一度他の大学を受験し直そうかとも思った。高校時代の遊びのツケで体験した停学処分の自暴自棄の状態から立ち直らせてくれた友人知人のありがたさを信じ、他人のためにと考えた行動が、余計なお世話と言われる大学での人間関係も、自分を見直す機会を与えてくれた。

限られた人数ではあったが、建築学科以外の人たちとの交流の中から、僻地の分校を訪ねるといふ新しい体験を知った。群馬県の後閑の奥、駅から徒歩で3-4時間の山の分校訪問では、初めて知る生活感を味わった。

「新聞はなんのためにあるのだろう?」

「分校の先生がためになるからって----」

と言ったので、

「1ヶ月とってみたけど、後は弁当を包むだけしか役立たないからやめた」。もちろんわれわれが訪ねても「お茶」が出るわけでもない。丸いちゃぶ台の上には、夕食の「おかず」用のどんぶりがひとつ

と家族の飯茶碗がひとつずつ膳の箸が添えられていた。

彼らの人間らしさ、素朴さ、暖かさは何にも代え難い。夜中でもわれわれが後閑駅に着くとジープやトラックで迎えに来てくれる。分校に着くと村落の人たちが待っていてくれる。車から降りると、満天の星の下に真白に輝く山ユリの香に包まれる。分校の中では自家製の焼酎を呑みながら明け方まで語り合う。分校の運動会の準備や飾り付けの手伝い。30-40人分の飯を薪で炊く。運動会のハイライト、村落対抗リレーではわれわれひとりずつ各村落に入り、走る。その応援のすさまじいこと。2-3日から長くても1週間の滞在。年に1度か2度の訪問でも歓迎してくれる村落の人びとに、公私にわたって大きな影響を与えている分校出身の先生の存在は大きい。

新潟県・佐渡の小さな島、粟島。ディスカバー・ジャパン以来、観光地として島を訪れた人は多いと思う。当時は、雨が降れば欠航、風が吹けば欠航。分校を訪ねたくとも島に渡れず、砂利運搬船に乗せてもらい訪れた。

小高い丘を越えて、港の反対側の村落への途中、人と行き交うこともまれであり、声をかけてもただ見つめるだけで、応答はない。われわれが訪れた前年に、ようやく夕方5時から夜9時まで、自家発電で電気が供給されるようになったという。滞在中、村の人と語れたことは一度もない。海岸にキャンプし、分校を訪れ、持参した本やマンガ本を贈り、子供たちと遊ぶ。帰りの道で「サヨナラ」とかかけた声に、ようやくうなずく程度だった。

自分たちを「本土の人」と言い、本州側の人間を「地方(じかた)」と呼ぶ粟島の生活には、なかなか受け入れてもらえなかった。

「建築科の学生が僻地の訪問をして、何をするのか?」と仲間の父親に尋ねられて答えられなかった

いずみもと・しんいち

1947年 東京生まれ

1970年 工学院大学建築学科(武藤章研究室)卒業

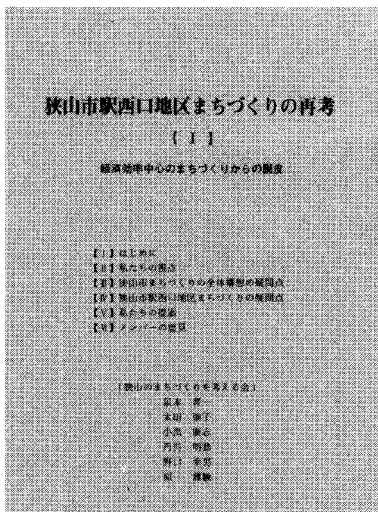
I.N.A新建築研究所入所

1973年 山口県宇部にてフリー

1974年 独楽蔵に参加

1981年 倉建築デザイン設立

現在にいたる



泉本氏が参加している「狭山のまちづくりを考える会」より発行された小冊子『狭山市駅西口まちづくりの再考』

のがきっかけで、僻地訪問も途切れてしまった。その答えは、残念ながら今も見つからない。建築学科の学生に戻り、仲間と国内・国外の情報をあさり続けた。ライト、ル・コルビュジエ、ミース、カーンなどからアーキグラム、ブルータリズムやメタポリズム、現象学や構造主義。1960-70年代の世の中の動きすべてに目を向けようと貪欲であった。アルバイトを通じて学外での交流も増えた。磯崎新のアトリエでの、何を描いているのか分からなかった大阪万博のトラスとロボットの図面。彼の自宅での、イタリアでの展覧会用のお化けの切り抜き作業。東大、芸大、工学院の学生アルバイトによる東大都市工学科での江東防災計画の模型づくり。旧帝国ホテル解体実測で知った孔雀の間の小屋裏からの覗き穴の発見。立正佼正会善門館の銭高組現場での模型づくり。そして六本木「アラブアール」での季刊雑誌『デザイン批評』関連の集まりなど、大学での4年間は、初期のイメージから脱した最高に楽しめた人生の一時期であった。

修業のはじまり

入学と同時に先輩が「新入生を手

伝いに使うためにつくった」というデザイングループ所属し、1年の時から卒業設計や修士論文の「作業員」であった。自分の卒業と女房（同級生）の卒業を合わせると、何回卒業設計をやったか分からない。ここでの体験が今の人生にもつながっているように思う。

今は亡き武藤章先生の研究室を選択したのも、そんな中で決めたように思う。先生と向かい合うときはいつも会話にならない。唯一、互角に渡り合えたのは、蓼科の山荘で相撲をとったときであろう。戦績は1勝1敗1分（引き分けは先生のベルト通しが破れたため）。もっと多くを語り合えたらと思うが、あまりにも早すぎた死であった。それでも狭山の自宅の隣に、先生に設計をお願いした病院ができたことは忘れられない思い出である。

その後しばらくして旧新宿校舎の廊下を先生と歩いているとき、「イズ（僕の略称）よ、仕事を紹介しろよ！」

と言われたときは、「冗談でしょう。先生にお願いできる仕事なんてありませんよ！」とは答えたものの、一瞬、寂しさと厳しさから頭の中が混乱し、次の言葉が出なかった。「建築家」と「経営者」、今自分が置かれている立場を振り返ってみると、その時すでに大きな教訓を与えられていたように思う。

卒業と同時に入社できたINA 新建築研究所での3年間も、生々しい記憶として今も残っている。就職先を迷っているうちに時期を逸し、先輩の口利きで入社。30代で逝った友人・東方とともに入社1年目の終わりに新入社員10人ほどで設計環境の改善目的で組合づくりに数ヶ月燃えたが、最後はひとり。社長から「俺の若いときに似てる」と言われてチョン。

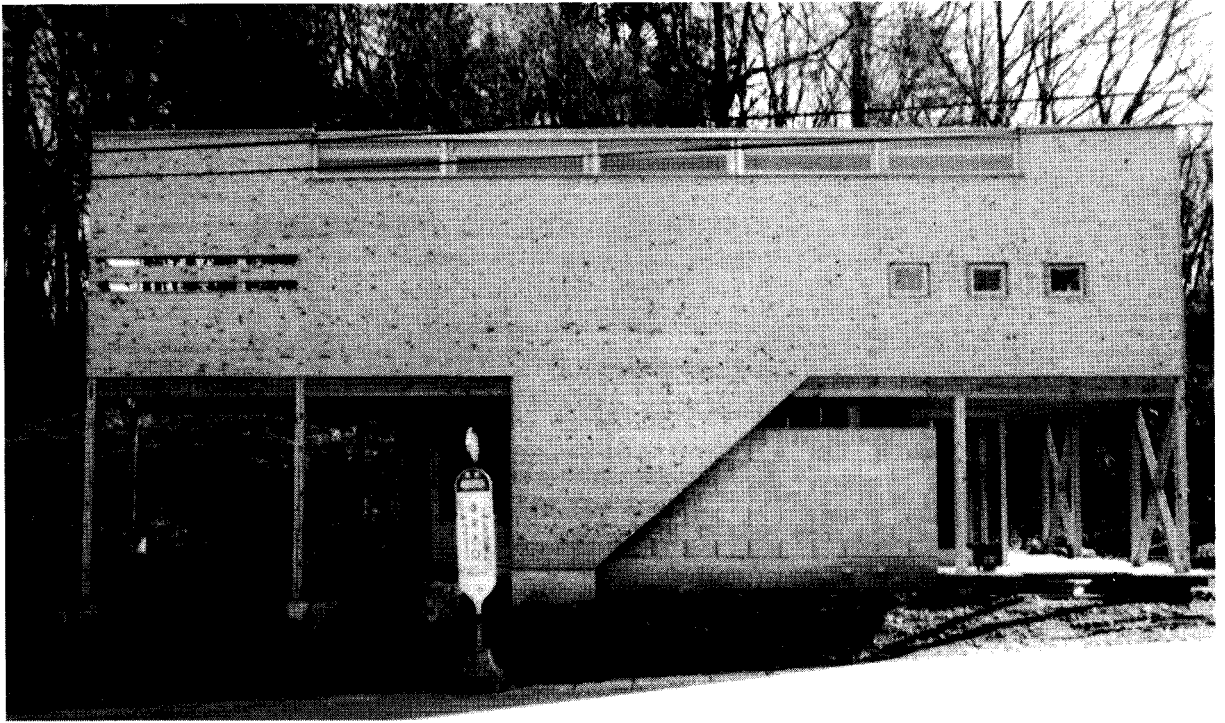
入社後、最初に味わった屈辱は、国公立大卒と給料の差があったこ

とである。理由は今も分からない。東北地方の山田町の文化会館コンペで200時間を越える残業をして、効率が悪いとボーナス査定が悪かったこと。京成オリエンタルランド（現東京ディズニーランド）の想像を越えた「お絵描き」を担当したこと。新日鐵相模原技術センター外装用にUSスチールのカーテンウォール採用（日本では唯一と思う）で、新日鐵側の最終決定なしで荷が横浜港に入ってしまった、その責任問題で怒られたこと。徹夜をして仕上げた原因を、翌朝、復元不可能なまでに細かく破り捨てられ「ここは学校じゃないよ！」と社長に一蹴され、悔し涙を流したことなどを含め、1年でやめなければ3年でやめると宣言してやめた3年間に得たものは大きかった。

「箱物づくり」と「組織」に別れを告げ、1年間女房の実家の設計監理に携わった。建築家として、施主として、現場監督兼作業員として朝から晩まで動き回った。残土の捨て場探し、鉄筋の加工組立て、コンクリート型枠組みから現場の掃除、近隣との交渉まで大事務所では体験できなかったことを知った。

そして1974年、学生時代から声をかけてもらっていた星野厚雄の事務所「独楽蔵（こまぐら）」創設とともに参加させてもらい、80年末でやめるまでの7年間は、直接今の自分に大きな影響を与えてくれた。東京で生まれ育った自分には、すべてが新鮮であり、過激であり、戸惑うことばかりであった。落葉樹の美しさと落葉掃き、落葉堆肥づくり。チャボの放し飼いとチャボ小屋づくり。街並みに仕掛けるイベント企画。そのすべてを手づくりで仕事のほかに実践する。そのエネルギーな姿は、今まで知っていたどの建築家像とも異質であった。

第二次大戦という背景の中で育った日本の中のアメリカ文化の影響



昨年12月に第一期が竣工した泉本氏の「活動拠点」

を受けた農村都市・入間、所沢という地域の特殊性に加え、米軍基地として今も残る近隣の横田基地周辺の盛り場や、俗に「ハウス」とよばれる米軍家族向け住宅街などから受けた影響は、理屈抜きに大きい。田舎と都会と米軍基地の織りなす不思議な地域文化は、歪みとともに未体験への誘惑であり魅力ともなった。

基地の返還とともに、この地域にも日本人が住み始めると、それまでの緑の芝生にカラフルなペンキ塗りの外壁、芝生の上での日光浴や読書、バーベキューといった日常の生活は一変し、身勝手な増築や駐車場、堀づくりが始まった。魅力的に輝いていた「アメリカ村」が、一瞬にしてスラム街に変わってしまった。

地域、人、そして「龕」

「住む」ことの難しさ、人間関係そして地域の変貌を眼の当たりにし、「なんとかしなければ----」と一昨年の11月からメンバー6人の「狭山のまちづくりを考える会」

をつくり、この2月に小冊子にまとめ自治体をはじめ、さまざまな分野の団体や人たちとの交流を求めはじめた。

狭山で設計活動を始めて10数年。

「建築家って何をやるの?」と言われ、うまく説明できなかったことから考えると、格段の差が出始めた今、新たなスタートを迎えた。昨年12月に新築した活動拠点を礎に、これまでの中腰の状態から、大地に根をはった交流を目指したい。

独立と同時につけた屋号「龕」は、多くの同窓生から怒られるかもしれないが、工学院大学の建築学科卒の証であり、その意味「心の拠り所」的な場づくりを目指して、同窓会誌『NICHE（龕）』の編集に携わったときから決めていた。独立するまでの間、幸い誰にも使われた形跡がないため、躊躇なく「龕」を採用したが、今回原稿を依頼された理由が屋号の「龕」であったことを考えると、その責任の重大さに尻込みをしそうである。

今、仕事をする中で思うことは、地域・人、そして職人たちとともに、少しでも評価され納得のいく道を歩むことである。長い道程ではあるが、一朝一夕にできるものではないことも知りつつある。単純に考え、説明することのもどかしさを味わい続ける「龕」ではあるが、これからの人生に恥じない「龕」にしたい。

第26期事業報告

- | | |
|-----------------------------|---------------|
| 1) 同窓会誌『NICHE』16号発刊 | 4) 準会員への援助 |
| 2) 各クラス, 研究室 OB会および厚生部会活動援助 | 5) 講演会懇親会等の開催 |
| 3) 名簿の編集 | 6) その他 |

第26期(1991年)一般会計報告

(単位:円)

決算		決算	
収入	支出	収入	支出
1)前年度繰越金 1,475,130	1)会誌発刊費 1,230,000 a)ニッチNo.15印刷費 1,000,000 b)編集費 200,000 c)雑費 30,000	1)前年度繰越金 1,475,130	1)会誌発刊費 1,212,475 a)ニッチNo.15印刷費 992,405 b)編集費 200,000 c)雑費 20,070
2)会費 2,301,000	2)各部会費 100,000 a)OB通信費 100,000	2)会費 2,380,000	2)各部会費 96,730 a)OB通信費 96,730
3)総会発送援助費 690,000	3)同窓会名簿整理費 80,000 a)整理費 60,000 b)郵送費 20,000	3)総会発送援助費 685,000	3)同窓会名簿整理費 94,948 a)整理費 72,988 b)郵送費 21,960
4)百周年募金運動 援助費 300,000	4)準会員援助費 0	4)百周年募金運動 援助費 20,291	4)準会員援助費 0
5)雑収入 1,450,000 a)同窓会名簿売上 250,000 b)ニッチ賛助金 1,200,000	5)総会費 2,580,000 a)総会通知印刷費 430,000 b)総会通知発送費 2,030,000 c)懇親会費 60,000 d)雑費 60,000	5)雑収入 1,479,000 a)同窓会名簿売上 340,000 b)ニッチ賛助金 1,028,000 c)総会懇親会費	5)総会費 2,602,663 a)総会通知印刷費 459,592 b)総会通知発送費 1,995,950 c)懇親会費 98,031 d)雑費 49,090
6)銀行利息 500,000	6)百周年募金運動費 300,000 a)郵送費 0 b)雑費 300,000	6)銀行利息 625,690	6)百周年募金運動費 20,291 a)郵送費 20,291 b)雑費 0
	7)本部費 50,000		7)本部費 33,046
	8)積立金 0		8)積立金 500,000
	9)三十五周年記念事業 援助費 1,922,003		9)三十五周年記念事業 援助費 1,922,003
	10)予備費 454,127		10)予備費 0
			11)次年度繰越金 182,955
合計 6,716,130	合計 6,716,130	合計 6,665,111	合計 6,665,111

(182,955+500,000)-1,475,130=-792,175(減)
繰越金

(単位：円)

第26期(1991年) 運用財産目録

第26期当初		第26期末	
1)三井貸付信託元金	9,500,000	1)三井貸付信託元金	9,500,000
2)三井貸付信託積立口	593,345	2)三井貸付信託積立口	1,171,059
3)第一勧銀	4,654,302	3)第一勧銀	1,619,271
4)第一勧銀定期	0	4)第一勧銀定期	7,844,285
5)郵便振替口座	237,260	5)郵便振替口座	66,110
6)現金	58,617	6)現金	48,630
合計	15,043,524	合計	20,249,355

(20,249,355-9,980,507)-(15,043,524-3,982,501)=-792,175(減)
 35周年記念事業分 35周年記念事業分

(単位：円)

第26期(1991年) 財産運用報告

	収入	支出	備考
三井信託	0	0	
三井信託(積立口)	577,714	0	1,171,059-593,345=577,714
第一勧銀	0	3,035,031	1,1619,271-4,654,302=-3,035,031
第一勧銀定期	7,844,285	0	
郵便振替口座	0	171,150	66,110-237,260=-171,150
現金	0	9,987	48,630-58,617=-9,987
合計	8,421,999	3,216,168	8,421,999-3,216,168=5,205,831

5,205,831-(9,980,507-3,982,501)=-792,175(減)
 35周年記念事業分

第27期(1992年) 事業計画 (案)

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 1)同窓会誌「ニッチ」17号発刊 | 4)準会員への援助 |
| 2)各クラス研究会、OB会および厚生部会活動の援助 | 5)講演会、懇親会等の開催 |
| 3)名簿の発刊 | 6)その他 |

(単位：円)

第27期(1992年) 一般会計予算 (案)

収入		支出	
1)前年度繰越金	182,955	1)会誌発刊費	1,273,000
		a)ニッチ No.16印刷費	1,043,000
		b)編集費	200,000
		c)雑費	30,000
2)会費	2,835,000	2)各部会費	120,000
		a)OB通信費	120,000
3)総会発送援助費(校友会より)	691,000	3)同窓会名簿発刊費	1,336,000
		a)印刷費	1,200,000
		b)整理費	100,000
		c)郵送費	36,000
4)雑収入	1,700,000	4)準会員援助費	0
a)同窓会名簿売上	500,000		
b)ニッチ賛助金	1,200,000		
5)銀行利息	700,000	5)総会費	2,762,000
		a)総会通知印刷費	510,000
		b)総会通知発送費	2,072,000
		c)懇親会費	120,000
		d)雑費	60,000
		6)本部費	50,000
		7)積立金	300,000
		8)予備費	267,955
合計	6,108,955	合計	6,108,955

工学院大学建築学科同窓会会則

[前文]

私たち建築学科同窓生は、伝統ある母校を愛し、交友を維持発展させるため、互いに親睦を図り、相互扶助の精神を尊び広く建築の諸問題を研究することを目的とし、健全な人間関係の確立と意志伝達の機関として、ここに規約を定めて、工学院大学建築学科同窓会を結成する。

[第1章] 総則

第1条 本会は工学院大学建築学科同窓会という。

第2条 本会は本部を社団法人工学院大学校友会事務室に置く。

第3条 会則の改変は総会の承認を得なければならない。

[第2章] 事業

第4条 本会は前文の目的を達成するために次の事業を行なう。

1. 会誌および会員名簿の刊行
2. 会員相互の親睦
3. 会員に対する援助
4. 講演会、研究会の開催
5. 建築学科に対する各種支援
6. 校友会、他学科同窓会との交流
7. その他本会の目的を達成するために必要と認められた事業

[第3章] 会員

第5条 会員は正会員、準会員、名誉会員、特別会員および賛助会員とする。

第6条 正会員は次に定める会員をいう。

1. 工手学校および工学院の建築および土木科の卒業生
2. 工学院大学短期大学建築学科の卒業生
3. 工学院大学建築学科の卒業生および大学院建築学専攻の修了生

第7条 準会員は工学院大学建築学科および大学院建築学専攻（本学卒業生を除く）に在学する学生とする。

第8条 名誉会員および特別会員は、本会の目的に賛同し運営委員会の認めた個人および団体とする。

第9条 賛助会員は、本会の目的に賛同し各種事業を支援する個人および団体とする。

[第4章] 役員・運営委員

第10条 役員

1. 会長 1名
副会長 4名

幹事 若干名
会計 1名
会計監査 2名

2. 役員は次の方法で正会員より選出する。

- 1) 会長・副会長は運営委員会で決定し総会の承認を得る。
- 2) 幹事・会計は運営委員会の同意を得て会長が任命する。
- 3) 会計監査は運営委員会で決定し、総会の承認を得る。

第11条 運営委員

1. 運営委員は正会員より以下の区分で選出する。

- 1) 大学院・大学 各研究室1名以上
- 2) 工手学校・工学院の建築および土木、工学院短期大学建築学科 若干名
- 3) 準会員 運営委員補佐として各研究室1名以上

第12条 役員と運営委員の任期は3ヵ年とするが、再任を妨げない。ただし会長は連続3期を超えてはならない。

第13条 役員と運営委員の任務

1. 会長は本会を代表して会務を総理する。
2. 会長は運営委員会の承認を得て顧問、相談役を置くことができる。
3. 会長は運営委員会の補佐1名を各研究室ごとに置く。
4. 副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はその職務を代行する。
5. 幹事は会長・副会長を補佐し各種事業の実務を行なう。
6. 会計は会計業務を行ない必要に応じて会長の指名により会計補佐を置くことができる。
7. 運営委員会は本会で定める各種事業を円滑に運営するための実務を行なう。

[第5章]

第14条 役員会は会長、副会長、幹事、会計で構成し、運営の方針を立案し運営委員会に諮り実行する。

第15条 運営委員会

1. 同会は会長が招集し、年2回以上開催する。また、運営委員の1/3以上の要求があった時は招集しなければならない。

[第6章] 総会

第16条 総会は本会最高の議決機関で、正会員をもって構成し、議長は正会員の中から選出する。

第17条 準会員、名誉会員、特別会員および賛助会員は議決には加わらない。ただし傍聴は拒まない。

第18条 通常総会は毎会計年度末より75日以内に開催する。

第19条 臨時総会は次の場合会長が招集する。

- (1) 運営委員会が必要と認めた時
- (2) 100人以上の正会員から、会議の目的を示しその開催を請求した時

第20条 総会の目的、期日および開催場所は2週間前にこれを全正会員に通知しなければならない。

第21条 会員が議案を提出の場合は2ヵ月前に運営委員会にこれを提出しなければならない。

第22条 次の事項は通常総会において承認を受けなければならない。

- (1) 前年度事業報告
- (2) 前年度収支決算
- (3) 本年度事業計画
- (4) 本年度収支予算
- (5) 財産目録
- (6) その他運営委員会が必要と認めた事項

第23条 総会の決議は出席正会員の過半数の同意を必要とする。

第24条 総会の決議で賛否同数の場合は議長採決とする。

第25条 正会員は書面をもって総会における議決権を議長または役員に委任することができる。

[第7章] 校友会提携カード会員

第26条 同カードの利用

1. 正会員の住所変更は、カードの住所変更によって自動的に同窓会名簿が訂正される。
2. 同窓会会誌の編集・発送費は本人の希望により自動的に同窓会に入金できる。
3. 同カードは校友会ファカルティークラブ（仮称）での利用ができる。
4. その他同窓会が必要と認めた場合。

第27条 本同窓会会員は校友会提携カード会員としての資格を持つ。また第26条「同カードの利用」目的のため正会員は申し込みにより同会員となる。

第28条 同カードの第26条による利用方法については、運営委員会にて検討し決定する。ただし全会員に関する場合は総会の承認を得る。

[第8章] 会計

第29条 会計は次の通りとする。ただし金額については運営委員会で決定し総会に報告する。

1. 正会員費
2. 会誌の編集・発送費
3. 賛助会員会費
4. その他

第30条 会計は、通常会計および特別会計に分ける。

1. 通常会計は会計年度内収支とする。
2. 特別会計は特別に企画された事業に対する会計とする。

第31条 積立金保管方法は次のいずれかにしなければならない。

1. 国庫債券
2. 郵便貯金
3. 銀行預金

第32条 会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

第33条 毎年度予算および決算は会誌により報告する。

[第9章] 付則

第34条

1. 本会則は昭和42年1月22日より発効する。
2. 会則一部変更 昭和46年11月7日より発効する。
3. 合併に伴う変更 昭和51年12月5日より発効する。
4. 合併に伴う変更 昭和54年12月15日より発効する。
5. 会則一部変更 昭和58年5月29日より発効する。
6. 会則一部変更 平成4年6月14日より発効する。

会則改訂の主旨

昭和42年発足の「同窓会の規約」はすでに25年を経過し、そのあいだ同窓会の運営上現状にそぐわない面が発生しております。また「校友会提携カード」の積極的利用と若手正会員、または準会員の実務面の参加による同窓会活動の活性化のために、今回会則を改正することになりました。この改正案は、平成4年6月14日に行なわれた建築学科同窓会総会にて承認されました。

工学院大学建築学科同窓会会誌『NICHE (ニッチ)』発刊のための賛助金のお願い

ここ数年間お願いしてまいりましたこの賛助金は、今年には大幅に落ち込みを見せ、前年度の約半分になってしまいました。皆様の賛助金は、いまや『NICHE』の発行を続けるためには欠かせぬ財源になっております。発送費を含めると、本会の予算の大半をこの事業に費やしていることとなりますが、収入源の大半が

現役の学生諸君の終身会費（1人7,000円）の納入に頼っている現在、増加の一途である会員数を考えますと、経費がまかなえない状況になっております。卒業された方々のための事業の大半がこの発刊です。なにとぞよろしくご協力のほど、お願い申し上げます。

1986年度実績	351口	309人	総額	702,000円	
1987年度実績	356口	226人	総額	712,000円	『NICHE』12号 p.34参照
1988年度実績	365.5口	261人	総額	733,000円	『NICHE』13号 p.36参照
1989年度実績	529.5口	298人	総額	1,059,000円	『NICHE』14号 p.34参照
1990年度実績	464.25口	268人	総額	928,500円	『NICHE』15号 p.29参照
1991年度実績	493.5口	256人	総額	987,000円	『NICHE』16号 p.32参照

1992年版同窓会会員名簿の頒布について

1992年版同窓会会員名簿

同窓会会員頒布価格 5,000円（予価／送料を含む）

会員外頒布価格 30,000円（予価／送料および協力費25,000円を含む）

『NICHE』の賛助金を同じ振込用紙でいっしょにご送金くださって結構ですが、裏面に必ず名簿代5,000円と別記してください。

この記入がないと、全額『NICHE』賛助金とみなされてしまいますので、必ずご記入くださいますようお願い申し上げます。

